

VAIOLET EVERGARDEN

— 3つのヴァイオレット —

愛の降る島

LOVE IS HERE

春日希望



その日、ヴァイオレットはエヴァーガーデンは灯台で、テーブルに両の腕を置き、専門の技師と対面する形で座っていた。胸元には金に縁取られたエメラルドのブローチが輝いている。

「さて、これで大丈夫だ。今月のオーバーホールは終わったよ。指先を動かしてみて」

ヴァイオレットは両手の指を握っては開き握っては開きの動作を繰り返した。

「問題無さそうだな。そうだ。メンテナンスを終えてから何だが、肘の調整器具と指の関節は新品を持ってきていたんだ。今ならまだ交換できる時間はあるが、どうする？」

「いいえ、このままで問題有りません。肘は良く馴染んでいますから、今すぐに交換する事は無いと思います」

「そうか。それではそのペンで字が書けるか試してみて」

ヴァイオレットは言われるままにペンで紙に文章を書いた。それは流麗で見事な筆記体だった。義手ではない者も、ここまで綺麗に書ける者はそう多くないだろう。

「見事なモノだ。よく使いこなしている。大丈夫なようだな。では肘関節の交換は来月にしよ

う。馴染んでるように見えても大分ガタが来ている」

「判りました来月にお願います」

「それじゃ、また来月に来るから。」

それにしてもさつきから、外が騒がしいけど、何かあるのかい？」

「この島に、郵便社が出来るのです」

ヴァイオレットはそう言つて静かな微笑みを浮かべた。

その日、ガルダリク領にあるエカルテ島に住む人々の殆どが島の灯台へ集っていた。

ヴァイオレットはエヴァーガーデンは正装しその向かいにはクラウディアはホッジンズが、やはり正装していた。

「——ここに、CHエカルテ郵便社を設立し、社長をジルベールはエヴァーガーデン。そして副社長にヴァイオレットはエヴァーガーデンを任命し、CH郵便社から独立したモノとする。

おめでとう、ヴァイオレットちゃん」

ヴァイオレットはホッジンズから宣誓書を受け取った。島民から控えめな拍手が沸いた。

「これはカトレアが書いたモノだ。大事にして欲しい」

「はい」

そしてホッジンズは島の人々の方を向いた。

「そして島の皆さん。」

我々、ライデンシャフトリヒの人間を受け容れて下さり感謝しております」

すると島の村長が一步前へ出た。

「戦争は終わったんじゃ。過去の仇も憎しみも忘れることは出来ない。だが、未来へ向かって進む事は互いに手を取り合う事が出来る」

「ありがとうございます、村長。そのお言葉だけで救われます」

ホッジンズは襟を整え村長へ一礼した。

「さて、これでエカルテ島に待望の独自の郵便社が出来た。その記念に贈り物があるんだ」

ホッジンズは薄い箱を取り出し、ヴァイオレットへ差し出した。

ヴァイオレットはそれを両手の義手を革の手袋で隠した手で受け取った。

「箱を開けてごらん。ヴァイオレットちゃん」

言われるままにバイオレットが箱を開けると、木のフレームの中に絵が描かれた小さな紙片が一枚、中央に配されていた。

「これはいったい、何でしょうか？」

「これはここエカルテ島のみで発行される切手だ。独立の証しだよ」

切手の縁は独特のカットで見た事が無い。そして図柄は鞆と日傘を持ち、街路を歩いている女性が横から描かれていた。

「あの、この切手の女性は？」

「考えに考え抜いたが、それはヴァイオレットちゃんをモデルにした。これから、エカルテ郵便社を担う訳だからね。それに多くの困難を乗り越え様々な事を成し遂げてくれた。」

実は島の方々とも相談したんだが、やはりヴァイオレットちゃんが相応しいってね」

「かしこまりました。滞りなく、責務を果たします」

「それにヴァイオレットちゃんには電報の仕事もあるしジルベールには灯台守という任務もあるし、二人だけの郵便社で大変だと思うが、無事な業務を祈る。以上！」

「ハッ！」

ヴァイオレットは踵を合わせ不動の姿勢を取り思わず敬礼した。

「ヴァイオレットちゃん、敬礼はもういいんだよ。そう言うオレも思わず軍隊口調になってしまった。失敬」

「そうでした。失礼しました」

「ジルベール、後を頼む。社長だぞ、お前は」

「ああ」

ホッジンズビジルベール——かつてギルベルト・ブルーゲンピリアと名乗っていた青年は、義手の右手で固く握手を交わした。

ヴァイオレットはその様子をやはり静かな笑みを浮かべて見つめている。

「さてと、自分の仕事はここまでです。陸に帰ります」

「まあそう急くこともあるまい？ ホッジンズ氏。ささやかですが宴席を設けました。どうですか？」

「いやしかし、そこまで歓待を受ける身では——」

「あるんじゃないよ。のう？ みんな。待望の独立郵便社、しかもエカルテの名を冠している。これほどの喜びが何処にあるうか」

村長が一同を見回すと一様に皆頷いた。

「ではお言葉に甘えて、一日滞在を伸ばします。ヴァイオレットちゃん。無電で本社に伝えてくれるかな？」

「かしこまりました。あ、最初の仕事ですね」

「あ、そうか。ここの最初の仕事が郵便ではなくて——申し訳ない」
笑い声が広がった。

ガルダリク領エカルテ島。

小さな島だ。

戦争が終わり、ようやく若者が帰ってきた。人数は半分以下だが、それでも島は活気づいた。

島にジルベール——ギルベルトと同じく残る事になったヴァイオレットは、郵便業務を農業の傍らで行っていた女性から引き継ぎいた。しかしつてが無く、かつて働いていたCH郵便社を頼った。すると社長のクラウディアHホッジンズが何から何まで世話を焼き、郵便社の開局まで漕ぎつけたのだ。

ホッジンズが当初、郵便社に自分の名のイニシャルであるCHを外そうとしたがヴァイオレットがそれを固辞し、CHエカルテ郵便社、となった。ヴァイオレットなりのお礼である。

それにしても島に残ったヴァイオレットの日常は多忙だった。

灯台を郵便局兼住まいとしていたのだが、そこで各社の郵便業務に加え無電の資格を取り、電報を打ち、更に灯台の面倒を見る。

それが毎日続くのだ。

ヴァイオレットはそんな事は苦にもしなかったが、ジルベールは心配のあまり、強引に休

日を設けた程だ。そのジルベルも島唯一の学校の教師を務めた上、葡萄棚にあるリフトの運転やメンテナンス、それに灯台の保守などので、こちらも忙しい日々を送っている。しかし二人とも争いの無い、平和で充実した毎日を送れることに満足していた。

島の主な産業はやはり葡萄によるワイン造りだ。

戦時中は若者が兵役に就かされて下火になったが、戦後の現在はかなり回復している。またエカルテ島産のワインは高級品として世界中に珍重されている。全て手造り、というのがその理由らしいが単に近代的な機械が無いだけで島の人々は不思議がったモノだ。

もう一つは漁業である。

島は定期の貨客船の付く港以外はぐるりと岩礁に覆われ、良い漁場となっている。水も綺麗で海老や蟹、貝、小魚などが取れ、島で消費できない分は陸へ送り、ワインと共に貴重な収入源となっていた。

ヴァイオレットにとってそれら現金の出納は重要な仕事だ。また貨客船で運ばれてきた物資の管理などもあり、郵便業務より、自動手記人形——ドールの仕事としての仕事は専らそれらが中心だった。

無論、純品なドールの仕事もある。

この時代、識字率はそこそこだが、口語をそのまま文語にできる市井の人々は少なかつた。文法が難しいという事もあり、そこで代筆業、ドールと呼ばれる自動手記人形という職業がある。

市井の人々はメモ程度なら書けるが長文を書ける人となると、教育レベルからまだまだ少なかつた。またドールは女性に限られ社会進出の代表格であり、そう言う意味でも花形職業であつた。

ただし商人は別で、帳簿を付ける為に識字率は格段に高かつた。それでも繁忙期はドールにも仕事を依頼する事が多く、ヴァイオレットも村長と顔を突き合わせ、出納業務をすることが多い。

学校で教えるのは文字と単語そして文法という順番である。文法は文語で口語から直すのは低年学年には流石に難しかった。高学年になつても文語の文法の難解さから中々身に付かない者が多い。

自動手記人形、ドールはそれらの仲立ちする職業だ。そして淑女としての一流マナーも身に着ける為、ますます女性の憧れの職業となつていったのだつた。

そんな全ての業務を終えた午後遅く、島の村長が灯台の郵便社へやって来た。